

## プロジェクトU調査レポート

## コウガイビルとその分布

プロジェクトUでは「コウガイビル」という生き物の分布を調べています。コウガイビルは「ヒル」という名前がついていますが、環形動物のヒル（蛭）ではなく、扁形動物というグループの生き物です。扁形動物には川にすむナミウズムシ（いわゆるプラナリア）等が知られていますが、コウガイビルは陸生です。体はリボンのようなながむし状で、頭の部分はイチョウの葉のように広がっています。この形が昔の髪をかき上げる道具の「笄」に似ていることからこの名前がついています。長さは数cmから10数cm程度ですが、種類によっては成長すると1mを超えることもあります。コウガイビルは肉食で、主にカタツムリ等の土壌動物を食べているようです。

コウガイビルは分類や生態の研究が進んでいません。町中でも探せば見つかりますが、どんな種類がいるのかはよくわかっていません。そこで、生息情報と標本を集めることにしました。コウガイビルの正確な同定は生殖器や消化器等の形態を調べる必要がありますが、ひとまず外部形態だけを手がかりに同定しています。それによると、今のところ大阪府下で見つかったコウガイビルは3種（群）です。1つはワタリコウガイビル*Bipalium kewense*です。背面は淡黄褐色で、幅の異なる5本の茶褐色の線模様があり、<sup>けいぶ</sup>頸部（頭部の根元部分）で融合して斑状になります（図1：16ページ）。外来種で原産地は東南アジアと考えられています（川勝ら, 2007）。現在のところ、大阪市内の都市部で最も多く見つかっています。

2つ目はオオミスジコウガイビル*B. nobile*です。ワタリコウガイビルに似ていますが、背面の線模様が3本で、中心線が頭部に達するという特徴があります（図2：16ページ）。最大体長は1mになります。やはり外来種で原産地は中国南部と考えられています（川勝ら, 2007）。日本に移入・生息していることはわかっていたものの、プロジェクトUの調査ではしばらく見つかりませんでした。が、調査を進めるにつれて大阪市内でも見つかるようになりました。

最後はクロイロコウガイビルまたはその近似種*B. cf. fuscatum*です。図鑑に出ているクロイロコウガイビルの特徴を挙げると、背面は黒色で線模様はなく（図3：16ページ）、写真ではわかりにくいです

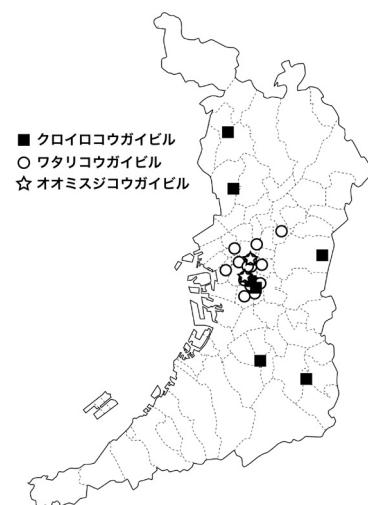


図4：大阪府のコウガイビルの分布（2013年4月までの情報に基づく）。

が小さい眼点が頭部から頸部に広がっています。また、ほふくしている時に頭部の縁にノコギリ状の細かい突起が出るという特徴もあります。これらに合致するものをこの調査ではクロイロコウガイビルとしています。現在のところ周辺の丘陵地で見つかっていますが、阿倍野区や東住吉区の公園などでも見つかっています。丘陵地のものと都市部のものが果たして同種なのかどうかは検討の余地があります。

途中段階ですが、分布図（図4）を見てみると少なくともワタリやオオミスジが都市部に多く、郊外では少ないと、外来種に一般的な傾向はあります。ただ、クロイロの分布の実態はこのデータ数ではよくわかりません。引き続き、コウガイビルの情報を募集します。自宅の庭、公園、畑などで植木鉢や石の下を探してみてください。雨上がりが狙い目です。見つけたら、70~99%エタノールに漬けて博物館に持ってきてください。エタノールと標本瓶は博物館でお分けしています。また、可能なら標本にする前に生時の「全体」と「頭部」の写真を撮ってもらえると同定の助けになります。すぐに標本にできない場合は冷凍してもかまいません。標本は動物研究室の石田までお送りください。

**謝辞：**写真及び標本情報を提供してくださった皆様に感謝いたします。

## 参考文献

川勝正治・西野麻知子・大高明史. 2007. プラナリア類の外来種. 陸水学雑誌, 68:461-469.

<石田 惣：博物館学芸員>



図1：ワタリコウガイビル（大阪城公園）。本文15ページ。

図2：オオミスジコウガイビル。右上は頭部の拡大（京都府城陽市、丸山健一郎氏撮影）。本文15ページ。

図3：クロイロコウガイビルまたはその近似種（枚岡公園、小林春平氏撮影）。本文15ページ。